

〈書評〉

John Dillery, *Clio's Other Sons, Berossus and Manetho*,
Ann Arbor, University of Michigan Press, 2015,
pp. xxxviii+494.

星野宏実

はじめに

本書の著者 John Dillery は、1999年の論文を皮切りに、紀元前3世紀の作家であるエジプト人マネトンとその作品を中心に論文を複数発表している¹⁾。本書は、そのマネトンとさらにその同時代人である著作家ベロソス両者の作品について論考をまとめ、新たな見解を含め再構成したものであり、両著作家の執筆意図を明らかにすることを目的とする。

ベロソスはセレウコス朝下で『バビロニア史』（もしくは『カルディア史』）を、マネトンはプトレマイオス朝下で『エジプト史』を、それぞれ自らの母国語ではないギリシア語で執筆した。両者は神官職に就いていたとされるが、その人物像については史料が共に少なく、得られる情報は僅かである。また、両作品のオリジナル・テキストは存在せず、後世の作家による断片的な引用から、その内容は共に創世期から執筆当時までの時代を対象としていることが分かっている。これらの共通点から、両者はヘレニズム期の非ギリシア人歴史家として併せて名前が挙げられることが多い²⁾。

評者は、別稿執筆の際、マネトン『エジプト史』の最新の研究書として本書を参照した³⁾。ここでは十分に評することができなかったが、本書は同分野において大変有益であるため、本稿において改めて取り上げていきたい。マネトンはエジプト人でありながら、マケドニア出身のプトレマイオス朝宮廷との関わりが確認できる早期の人物である。そのため、彼はプトレマイオス朝エジプトにおける、ギリシアとエジプトの文化的接触の文脈において語られることが多い。一方で、彼の『エジプト史』は上下エジプトの統一からプトレマイオス朝によるエジプト支配の前の時代までを扱い、王たちを30もしくは31の王朝に分けて、エジプト

1) マネトンについては、J. Dillery, *The First Egyptian Narrative History; Manetho and Greek Historiography*, *ZPE* 127, 1999, pp. 93–116; Id., *Manetho and Udjahorrsne: Designing Royal Names for Non-Egyptian Pharaohs*, *ZPE* 144, 2003, pp. 201–202. ベロソスについては、Id., *Berossos's Narrative of Nebopolassar and Nebchadnezzar II from Josephus*, *The World of Berossos*, Wiesbaden, 2013, pp. 75–96.

2) 例えば、G. P. Verbrugge and J. M. Wickersham, *Berossos and Manetho, Introduced and Translated*, Michigan, 2001.

3) 星野宏実「マネトン『エジプト史』とヘレニズム世界—プトレマイオス朝エジプトにおける歴史認識の変化—」『史窓』75, 2018年, 1–22頁。

の通史を記録する。この王朝区分は、現在のエジプト学で使用される時代区分の年代指標となっている。ここから、『エジプト史』は現在に至るまでエジプト学の分野で広く活用されてきたといえる。以上のように、作家であるマネトンにはヘレニズム史において、『エジプト史』はプトレマイオス朝よりも前のいわゆる王朝時代史において、それぞれ異なる研究領域で扱われており、マネトンが『エジプト史』を執筆した目的や、その背景など、作家と著書が合わせて論じられることは少ない。この問題点は、地域こそ異なるものの、ヘレニズム期の作家であるベロソスにも同様に指摘できるだろう。本稿で取り上げる Dillery の著書は、作品内容を考察することで、その背景にある作家の意図を明らかにすることを目的としている。これによって本書は、作家と作品が異なる研究領域で扱われてきたという、両作家についての従来の問題を解消する一助として位置づけられる。

本書の構成は以下の通りである。

Preface

Part 1 History Matters

Chapter 1 Introduction

Part 2 The Vectors of History: Time and Space

Chapter 2 Time: Berossus, Manetho, and the Construction King Lists

Chapter 3 Space: Regional Perspective and Authentication in Berossus and Manetho

Part 3 Narrative History

Chapter 4 The Great Narratives: Introduction

Chapter 5 Berossus's Narratives

Chapter 6 Manetho's Narratives

Chapter 7 Conclusion to Narratives

After Words

Preface では、第一に『バビロニア史』、『エジプト史』の両者を引用した後1世紀のフラウィウス・ヨセフスの記述から、ベロソスとマネトンの人物像に迫る。ヨセフスによれば、彼らはそれぞれバビロニア、エジプトの生まれであり、共にギリシアの教養（パイディア）を身に着けた人物であった。例えば Dillery は、マネトンについてプルタルコスの証言を引用し、プトレマイオス1世によるサラピス神の導入の際にマネトンが王に対して助言したというエピソードを挙げ、プトレマイオス朝におけるマネトンの立場を示している⁴⁾。第二に Dillery は、バビロニアとエジプトの両地域が共に、前5世紀のヘロドトスによって執筆対象となったことを挙げ、これらを踏まえた上で、各地域の伝統的な歴史記述におけるベロソ

4) Plut., Mor., De Is. et Os., 361F–362A.

ソスとマネトンの役割と、ギリシア人作家からの影響による両作家の革新的な面を強調していくことを明記している。ここで、Dillery は本書に先立つ P. Green と I. S. Moyer の見解を挙げ、自身の立場を明確にする。

Green は、ペロッソスとマネトンが、新王権による支配が容易になるように現代の「地域研究」に相当する作品を執筆したと述べ、両者をマケドニア人王権の「意欲的な協力者」もしくは「帝国のおべっか使い」と位置付けた⁵⁾。一方で Moyer は、Dillery の1999年論文に反論する形で、「『エジプト史』が、ギリシアの歴史編纂の影響下にあるとは言えない」と述べ、マネトンを、エジプト古来の流儀で外来王権に対し歴史を提示する「土着文化の擁護者」であると位置付けた⁶⁾。前者の Green の意見に対して Dillery は、ペロッソスとマネトンの両者が著書で自国を創世の地として記し、それぞれの故国を文明の中心地として示したことから、両者の著書は愛国心に基づくものであるとして異議を唱える。また後者の Moyer に対しては、両作品がギリシア語で執筆されていることを強調し、先のヘロドトスによる両地域の扱いに対して返答しているのだと反論する。以上のように、Dillery は両極端な二者の意見を問題視し、本書ではペロッソスとマネトンを「帝国のおべっか使い」と「土着文化の擁護者」の中間に位置づけていくと述べる。

Part 1 Chapter 1 では、両作品成立前のアレクサンドロスとディアドコイの時代における、歴史叙述を重視した支配者たちの姿勢について述べる。Dillery は、まずアレクサンドロスのアラビアでの逸話を挙げる。これはアレクサンドロスが、ヘロドトスの記述からアラビア人が二神のみを信仰していると知り、この記述を踏まえた上で自身が三番目の神として信仰されることを望んだ、というものである。また、Dillery は、アレクサンドロスの東方遠征に歴史家カッリステネスが同行し、その記録を残したことも挙げる。このような歴史叙述を重視するアレクサンドロスの姿勢が、その後のプトレマイオス1世の執筆活動の例にも確認できるとし、この姿勢がアレクサンドロスからディアドコイに継承されたと述べる。さらに、ペロッソスとマネトンに共通する神官職という立場についても言及する。両作品の舞台であるバビロニアとエジプトは、ペルシアの「大王」からアレクサンドロス、さらにディアドコイによる支配へと、外国人の王権によって次々と移り変わる情勢を目の当たりにしてきた。そのような情勢の中で、両地域の神官層は、現地の文化やシステムを伝え、王権を監視、助言する役目を担っていたと Dillery は指摘する。ペロッソスとマネトンの両者の執筆活動には、こうしたディアドコイの時代に至るまでの歴史叙述を重視する潮流と、神官という社会的立場とが背景にあったとするのである。

Part 2 Chapter 2 では、『バビロニア史』、『エジプト史』を概観し、両地域において前3000年代から存在する歴史記録と、マネトンとペロッソス両者の著書との比較を行う。『バビロニア史』は、第1巻（創世期）、第2巻（洪水の発生）、第3巻（新アッシリア～セレウ

5) P. Green, *Alexander to Actium*, London, 1990, pp. 325–326.

6) I. S. Moyer, *Egypt and the Limits of Hellenism*, Cambridge, 2011, pp. 103–104 et n. 66.

コス朝アンテオコス1世治世)で構成される。また『エジプト史』は、第1巻(神話の時代～第11王朝)、第2巻(第12～19王朝)、第3巻(第20～30(31)王朝)で構成される。両作品には、それぞれの地域における伝統的な歴史記録、例えば「王名表 King-list」との対応が見られる。さらに、両作品ともに、それぞれの地域について先立って記録するヘロドトス『歴史』との類似点やその訂正が指摘できる。特に『エジプト史』については、エジプト国内に留まらずギリシア世界の事象を複数記録していることが分かる⁷⁾。以上から Dillery は、ペロッソスとマネトンとを、伝統的な歴史記録を基に新たな形で歴史叙述を行った、両地域における歴史叙述の「パイオニア」として評価している。

Chapter 3では、歴史叙述における「空間 Space」に着目し、(1)対象となる地域、(2)テキストが作成・保存されてきた場所の二つの観点から考察する。(1)について、両者ともにそれぞれバビロニアとエジプトを対象とすることは明確である。しかし『バビロニア史』では、都市であるバビロンにその記述が集中しているため、Dillery はペロッソスがバビロンを中心として著書を展開していると指摘する。(2)については、両者ともに作品内において言及がない。そのため、この点についてはバビロン、エジプト両地域の伝統的な慣習、もしくは施設を基に考察が進められる。

ペロッソスが対象としたバビロンでは、天変地異などに備え、重要な記録を地中に埋めて保管する習慣があった。Dillery は、そのように保存されてきた記録が『バビロニア史』の執筆に役立てられたと推察する。一方、マネトンが対象としたエジプトでは、王朝時代から存在する「生命の家」をテキスト作成・保存の場として取り上げる。「生命の家」とはエジプトにおける神殿付属の図書館のようなもので、碑文史料の作成や記録の保存が行われてきた施設である⁸⁾。この「生命の家」はプトレマイオス朝期にも存在が確認されており、マネトンが神官職にあったことから、彼が「生命の家」の記録を参照することが可能であったと推察される。Dillery はそれらの記録を利用することで、『エジプト史』が作成されたと考察する。

Part 3からは、伝統的な歴史記録と、ギリシアの歴史叙述の二つの観点から、両作品の具体的な内容を考察していく。Chapter 4では、その導入としてバビロニア、エジプトの両地域における従来の歴史記録を扱う。両地域には、先述のように両作品の成立前から先述の王名表や年代記、さらに文学テキストが存在した。これは歴史を「記録」する行為である⁹⁾。両地域では、すでにアレクサンドロス以前から、歴史を「記録」として残していく意識が存在していたのである。Dillery は、ペロッソスとマネトンがこうした「意識」を背景に、自らの作品にギリシアの連続する「歴史叙述 narrative history」の手法を取り入れたと述べ、

7) 『エジプト史』の概要に含まれるギリシア世界の事象については、星野、前掲論文、表③。

8) A. H. Gardiner, *The House of Life*, *The Journal of Egyptian Archaeology* 24, 1938, pp. 157–179.

9) 大戸千之『歴史と事実—ポストモダンの歴史学批判をこえて』京都大学学術出版会、2012年。

これはペロッソスとマネトン登場前には確認できない、両地域における新たな動きであると論じる。

Chapter 5では、ペロッソスの叙述内容について、神話的叙述と非神話的叙述に分け考察する。第1, 2巻にあたる神話的物語では、「寓話的な記述」に着目する。『バビロニア史』で語られるティアマトとマルドゥックの戦いや、半魚人オアンネンスが語る創世の逸話には、Dilleryいわく「寓話的な記述」が確認できる。本書によれば、前6世紀には既にギリシアで『イリアス』を寓話的に捉える解釈が存在しており、前2世紀にはこの解釈が非難されるほど広く普及していた。Dilleryは、前3世紀のペロッソスがこのギリシアの慣習を認識しており、意識的に「寓話的な記述」の手法を採用したのだと推測する。また、第3巻にあたる非神話的叙述では、ヘロドトスにも共通して登場する新アッシリアの王センナケリブについて取り上げる。Dilleryは、ここにヘロドトスの作品と『バビロニア史』との類似性を指摘しており、ペロッソスがギリシア歴史叙述からの影響を受けていたと論じる。

Chapter 6では、マネトンの叙述内容について、ヨセフスの引用を基に「ヒクソス1期」、「セトスとハルマイス兄弟」、「ヒクソス2期」の、三箇所に分け考察する。「ヒクソス1期」では、前17世紀のヒクソスによるエジプトへの侵攻と、略奪の様子、さらにエジプト人の王によってナイル・デルタ東部に位置するアヴァリスへヒクソスが追放される様子が描かれる。Dilleryは、このヒクソスについての記述によって、読者へエジプトにおける不当な外国人支配のひな型が提示されたと考察する。続く「セトスとハルマイス兄弟」の箇所では、兄王セトスに対する弟ハルマイスの反乱の動向が描かれる。これはヘロドトス『歴史』第2巻の記述とよく似ており、ペロッソスと同様に、マネトンがヘロドトスの影響、すなわちギリシア歴史叙述の影響を受けて挿入されたものであると考察される。さらに「ヒクソス2期」では、預言者の言葉に従って王アメノフィスがレプラ患者を国外に追放すると、過去同じく追放させられたヒクソスがレプラ患者たちを支援し、彼らがエジプトへ襲来するという逸話が語られる。Dilleryはこの箇所に、王朝時代からの預言テキストの形が踏襲されていることを指摘する。以上の考察から、Dilleryはマネトンが王権の篡奪と回復の物語を示し、エジプト古来の予言的テキストの様式を利用することで、「原・黙示録的 proto-apocalyptic」な叙述を意図したと論じる。さらに、このマネトンの記述では、予言者や神官が度々登場し、王に対して援助や助言を行っていることが分かる。Dilleryは、この「原・黙示録的」な記述において、エジプト人神官の重要な役割が描かれていると読み取り、同じく神官職にあったマネトンの王朝内での立場を改めて読者へ示唆している。

Chapter 7では、以上の議論から結論がまとめられる。ギリシア・マケドニア支配期は、バビロニア、エジプトの両地域の歴史編集の慣習における分岐点であった。Dilleryによれば、『バビロニア史』と『エジプト史』は、両地域の伝統と、ギリシアの歴史叙述とを統合した作品であり、それはギリシアの歴史叙述の“なりすまし”や複製ではなく、新しい形の歴史叙述である。そのようなペロッソスとマネトンによる新しい歴史叙述には、両文明が外国支

配に直面した際、両地域の首尾一貫したシステムや文化を守るために、整合性を示す目的があったのだと、Dillery は結論付けている。

After Words では、ペロッソスとマネトンに続く前3世紀末の年代記作家デメトリオスを取り上げる。彼はエジプトのアレクサンドリアのユダヤ人で、ペロッソスやマネトンのように、ギリシア語で母国について執筆した。ユダヤ人である彼が母国について書くことは、既存の『聖書』の書き直しにあたる。Dillery は、デメトリオスが『聖書』で描かれた出来事を事実として証明するために、ギリシアの質疑応答の形式を取り入れたと述べる。さらに年代計測の素材を読者へ示すことで、既存の『聖書』から物語性を切り落として書き記したと論じる。すなわち、ペロッソスとマネトンが既存の歴史記録を基に母国の歴史叙述を一から構成したのに対して、デメトリオスは既存テキストの内容を検証した上で、事実として書き直したのである。この点において、先の二名の著作家とデメトリオスとの叙述は異なる性質を持つことが明らかである。すなわち、デメトリオスと比較することで、改めてペロッソスとマネトンを両地域におけるギリシア歴史叙述の継承者として位置づけているのである。

本書を概観すると以上の通りであるが、次に評者の考えを述べていきたい。なお、評者の専門上、マネトン『エジプト』についての意見が中心になることをここで断っておく。本書の特徴は、「作品の執筆理由の解明」にある。作品内容から著作家の意図を考察するというのは、おのずと作品と著作家を連動させて論じる試みとなる。本稿冒頭で述べた通り、マネトンについてはヘレニズム史の、『エジプト史』については王朝時代史の分野で扱われるのが従来の傾向であった。この点において、本書はマネトンと『エジプト史』の研究における新動向を示したといえるだろう。具体的な特徴としては、以下二つの点を挙げる。

第一に、ギリシアの歴史編纂の流れへの両著作家の位置づけである。前述のように、『パピロニア史』と『エジプト史』は、ヘロドトスのテキストとの比較が可能である。特に、マネトンによるヘロドトスの批判については、Dillery が1999年の論文から継続して着目している点でもある。マネトンがヘロドトスを訂正する箇所は複数あるが、代表的な例は、大ピラミッドの建設王についての記述である。これはギザの三大ピラミッドの一つ、クフ王のピラミッドについて両者が述べたものだが、ヘロドトスはこのピラミッドを建設した王を「ケオプス」と述べ、自身の記したエジプト史の中間に配置した。しかし、マネトンは同じ大ピラミッドの建築王を「スーフイス」と記し、「ヘロドトスが言うところのケオプスである」と補足した上で第4王朝に配置した。マネトンのこの配置は現在のエジプト学における見解とおおよそ一致するもので、この点についてマネトンの記述がヘロドトスより史実に近いことが分かる。ヘロドトスのエジプトについての記述には多くの間違いが含まれたことは現代でも広く知られているが、マネトンはすでに前3世紀においてヘロドトスを訂正していたのである。Dillery はこうしたマネトンの訂正こそが、彼のギリシアの歴史叙述への依拠を示していると論じる。

これは、先の Moyer の見解により踏み込んで反論するものである。Moyer は、あくまで

マネトンがエジプト古来の歴史記録、すなわち王名表や年代記の手法を採用して『エジプト史』を執筆したと述べる。ギリシア語での執筆については、対象とする読者がギリシア・マケドニア人であったため、便宜上、彼らの母国語であるギリシア語を採用したにすぎないと捉えるのである。さらに Moyer は、マネトンがヘロドトスを批判したことは認めつつも、それによってマネトンがギリシアの歴史叙述から影響を受けたことを証明することにはならないと論じる。この意見に対して Dillery は、先の著作家を批判する行為はマネトンに限らず、ギリシアの歴史編纂全般において、自己の優位性を示す常套手段であると反論する。すなわち、マネトンとベロソスは、既存の歴史記録をギリシアの歴史記述の手段に適応させることで、祖国の歴史叙述を行ったのだと述べる。故に、Dillery は Moyer について「そもそも歴史編纂の論争について、その性質を大きく見誤っている」と痛烈に批判する。このように、Dillery はギリシア歴史叙述の影響を否定する Moyer の意見にさらに反論することで、ギリシアの歴史編纂の流れにベロソスとマネトンを位置づける自身の見解を改めて明確にしているのである。

第二に、『エジプト史』の読者の想定である。Chapter 6 において、Dillery はマネトンのヒクソスに関する記述に着目し、そこに「原・黙示録的」な叙述があると述べる。従来この記述は、ヒクソスをモデルとした外来王権であるプトレマイオス朝への警告として捉えられがちである。しかし、Dillery は、マネトンの記述に「ネフェルティの預言」をはじめとする中王国時代以来のエジプトの伝統的な予言テキストの継承が確認できると論じ、外国人支配からの回復、すなわち「混乱からの回復」を読者に想像させる効果があったと述べる。Dillery は、これを「原・黙示録的」とし、マネトンが外来王権を目の前にしたエジプト人に対して、祖国の文化の維持を啓発したと論じる。すなわち、『エジプト史』の読者として、従来プトレマイオス王家を中心としたギリシア人・マケドニア人の支配階層が想定されていたものに対し、Dillery はさらに対象を拡大し、エジプト人をも読者として捕えているのである。これは従来の見解には無い視点であり、彼は『エジプト史』について新たな側面を見出したといえる。

次に本書の問題点を述べたい。一つは、マネトンの『エジプト史』におけるペルシア支配期の扱いである。マネトンによる王朝区分の内、第27王朝は、第一次ペルシア支配期（前525年～前404年）に該当する。マネトンは、ここにスメルティスもしくはマゴイという王を含める。しかし、この王は、ダレイオス1世治世のベヒストゥン碑文では、王位の篡奪者として碑文から削除されており、正統な王として認められていないことが読み取れる。マネトンがあえてこの不当な王を作中に取り込んだことから、Dillery はマネトンが反ペルシアの立場にあったと読み取っている。では、第二次ペルシア支配期（前342年～前332年）である第31王朝を、Dillery はいかに捉えているのか。そもそも、『エジプト史』の第31王朝の項目は Waddell 以来の研究者によって後世の引用者による加筆の可能性が指摘されている。そのため、多くの研究者は、『エジプト史』はエジプト人最後の王朝である第30王朝で完結し

たと述べる¹⁰⁾。プトレマイオス朝はエジプト人との融和を図るため、この第30王朝との継続性を積極的に主張している。それが顕著に現れるのが、プトレマイオス1世の王名である。古来、エジプトのファラオには、五重称号という王として五つの名前が与えられるのが慣例であり、プトレマイオス1世はその称号の一つに“ケベル・カー・ラー”の名前を持つ。これは第30王朝のネクタネボ1世の名前の一つと一致するため、プトレマイオス朝が第30王朝との関連を強調する手段としてその王名を用いた、とするのが現在の一般的な見解である¹¹⁾。すなわち、プトレマイオス朝は最後のエジプト人王権と自身を結びつけることで、エジプト支配の正統性の主張を試みたと考えられている。Dilleryもこの見解を引き合いに、マネトンは「第二次ペルシア支配期である第31王朝を削除し、第32王朝としてプトレマイオス朝からリストを再開した」と述べており、第27王朝の扱いと第31王朝の削除とをマネトンの反ペルシア・親プトレマイオス朝の姿勢として本書で処理しているのである。

しかし、ここで思い出したいのが、ヒクソスについてのDilleryの見解である。Dilleryは、ヒクソスの項目について、「混乱からの回復」を示す「原・黙示録的」な記述だと論じた。これに従えば、ペルシア支配期からプトレマイオス朝への移行の時代もまた、外来王権による「混乱からの回復」の時代である。すなわち、第31王朝もまた、ヒクソスと同じく、黙示録的な記述の対象となるべきである。しかし、Dilleryは第31王朝の削除について、マネトンの反ペルシア的な姿勢の表れであると述べるのみで、本書の特徴である黙示録的な記述との関連については論じない。本書で度々述べられる「混乱からの回復」という観点からすると、マネトンが反ペルシアの立場から第31王朝を削除したとする主張は不自然に感じられ、この王朝の削除をプトレマイオス朝との関連から論じるDilleryの姿勢には、矛盾を感じざるを得ない。

もう一つは、Dilleryが本書の冒頭で述べている、Green説とMoyer説の間へのマネトンの位置付けについてである。Dilleryは、この二名の研究者のように、ベロソスとマネトンが、支配者もしくは被支配者のどちらか一方の文化を優遇したと捉えることはできない、と述べる。この点において、ベロソスとマネトンが母国の伝統とギリシアの手法を用いたとして、Dilleryは両者の中間へマネトンを位置づけている。しかし、GreenとMoyerは、意見は違えども、いずれも『エジプト史』の読者をギリシア・マケドニア人であると想定し、プトレマイオス王家という時の支配者に向けた作家の姿勢について論じている。これに対してDilleryはギリシア・マケドニア人に加えて、土着のバビロニア人、もしくはエジプト人をも対象読者として捉えて考える。これは、Chapter 7の結論で述べているとおり、文明の危機に備える媒体として、整合性を提示する役目を『エジプト史』が担っていたとする考察から派生している。しかし、エジプト人を対象とする点については十分に論じられるもの

10) 『エジプト史』における第31王朝の項の扱いについては、マネトンの手によるものなのか、後世の加筆なのかは、先行研究においても意見が分かれている。星野、前掲論文、9頁、註41)、42)。

11) Moyer, op. cit., pp. 87–88.

の、プトレマイオス王家を始めとしたギリシア・マケドニア人のいわゆる支配者層に対する位置づけは不十分であるように感じられる。これは、本書の最大の特徴であるテキストの内容に焦点が当てられた結果、議論の対象がエジプト人読者に集中してしまったためであろう。Green と Moyer は、外来王権に対する被支配者の姿勢を読み取る媒体として『エジプト史』を捉えるが、その一方で、Dillery は上述のように外来王権のみに的を絞るのではなく、幅広い読者を想定して両作品にアプローチする。すなわち、両作品に対して Dillery は両研究者とは異なるアプローチを提示するのである。そのため、本書では、当初の目的である「両者の中間への位置づけ」というよりも、むしろ、本研究に新たな観点を加えることに重点が置かれたように評者には感じられた。

以上、評者の意見を述べてきた。『バビロニア史』、『エジプト史』の両作品は、テキストが断片的であるという制約がある上に、これらの内容を紐解くためには、バビロニア、エジプトの両地域における歴史記録の伝統とギリシアの歴史編纂とについての幅広い知識や言語の活用が必要とされる。そのため、本書で扱われる両作品は、研究対象として論じるには大変困難な作品であるということを改めて述べておきたい。特に、エジプト学においては、王朝時代史とヘレニズム史の間にはいまだに深い溝が横たわっている。それにも関わらず、本書はどちらかの研究領域に偏るということなく、作品を網羅的に分析し、解釈している。また、従来『エジプト史』についてはテキストの一部を抜粋し解釈するのが一般的であり、評者が知る限り、本書のように本作品を網羅的に扱う研究書は他に挙げることができない。それゆえに、本書から得られる情報は膨大なものであり、評者も自身の論考の執筆にあたって、重要な示唆を得ることができた。特に、対象読者を拡大するという新たな見解は、以上のように作品を全体的に考察したからこそ導き出されたものである。本書は、ペロッソスの『バビロニア史』とマネトンの『エジプト史』を研究する者にとって、必読の研究書であると言えるだろう。本書をきっかけに、両作品の研究がさらに発展していくことが期待される。

